

学生の音楽に対する嗜好調査と分析

吉 永 誠 吾

Survey and Analysis of the Actual Condition of Students' Favorite Music

Seigo YOSHINAGA

はじめに

教育における音楽の存在理由について、J.マーセルは「音楽は魂の憩いの場であり、人生の砂漠の泉です。悲しい時、疲れた時、困った時、私たちはそこへおもむくことができるのです。しかも、行けば絶対に幻滅を味わうことはないのです。そのようなすばらしいものを与えようとするのを、どうして生徒がこぼんだりするのでしょうか。音楽はまた、私たちの自我を広い世界へ連れだし、調和のある美の世界へさそい入れるのです。」¹⁾と述べている。

スポーツが人間の身体的な健康を担う上で重要な役割を果していることには、誰も疑問をさしはさまないであろう。それならば芸術による教育は、人間の精神的な健康の担い手であるといえないであろうか。マーセルも言っているように、音楽はもともと、私達の人生をよりよいものにするために存在するのである。²⁾

さて、我が国の洋楽は、特に若い演奏家達の国内・外における活躍をみる限りにおいては、近年著しい発展をとげてきているといえよう。しかし、それは決してその底辺が確実に広がっていることを意味しない。むしろ、その一方で、音楽教育に背を向けているものが多くいることを見落としてはならない。

例えば、あるコンサートのチケットが友人、知人や学校、団体などを通じて半ば強制的に売買されたり、本当によいコンサートがあまり人に知られないために、ガラ空きだったりするのである。

このような現状は、音楽がその本来の姿をゆがめられて存在し、果すべき役目をじゅうぶんに果していないといえないであろうか。

以上のような観点から、本論文では、近い将来、小学校の音楽教育を担うべき、学生の音楽における好みや経験を調査し、他の関連ある研究と比較しながら、音楽教育のあり方を考えようとするものである。また、マスコミも含めた音楽メディアについても考えたい。

I. アンケートからみた学生の音楽に対する好み及び経験について

以下に述べるのは、学生の音楽に対する好き嫌いおよび、経験についてアンケートしたものである。アンケートの対象は、昭和 57 年度後期および、昭和 58 年度前期「音楽教材研究」受講者全員で、男子 158 名、女子 123 名、計 281 名である。

1. 音楽活動における好き嫌いについて

表1は好きな音楽活動、表2は嫌いな音楽活動を調べたものである。好きな方の順位は歌唱、鑑賞、器楽、作曲となっている。全体でみると男女で差はないが、器楽に関しては女子の方がより好んでいる。このことは後に述べるように、女子の方がピアノやエレクトーンなど、学校外での音楽教育を受けている者が多いことも関連があるといえよう。

嫌いな方では作曲が他の三つを大きくひきはなしている。作曲が嫌われているのは、楽典に対する苦手意識からであろう。

NHK放送世論調査所の調べでは、楽譜の読める人は全体で19%、男は14%で女は22%となっていること³⁾も、このことを裏付けている。学生のレポートにも、単にペーパーテストだけのための丸暗記的な楽典の学習を批判する者が多い。

表1 好きな音楽活動 (男158 女123 計281)

音楽活動	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
歌 唱	94	59.5	74	60.2	168	59.8
器 楽	43	27.2	54	43.9	101	35.9
鑑 賞	82	51.9	59	48.0	141	50.2
作 曲	12	7.6	4	3.3	16	5.7
そ の 他	3	1.9	1	0.8	4	1.4

男女計の有意差($X^2=251.14, df=4, p<.01$)

表2 嫌いな音楽活動 (男158 女123 計281)

音楽活動	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
歌 唱	12	7.6	11	8.9	23	8.2
器 楽	27	17.1	6	4.9	33	11.7
鑑 賞	8	5.1	5	4.1	13	4.6
作 曲	71	44.9	72	58.5	143	50.9
そ の 他	9	5.7	7	5.7	16	5.7

男女計の有意差($X^2=265.245, df=4, p<.01$)

2. 音楽のジャンルに対する好き嫌い

表3は好きな音楽のジャンル、表4は嫌いな音楽のジャンルを調べたものである。

なおこの中の、ニューミュージック、フォークソング、ポップス、フェージョン、民族音楽、邦楽、演歌、パンクなどは調査項目にその他としている中からひろったものである。

好きな方では歌謡曲がトップで特に男子の数値が高い。クラシックの28.8%という数値はかなり高いように思われる。特に女子ではトップの歌謡曲と並んでいる。NHK放送世論調査所が調べているものは、音楽の分類がかなり細かいため、この調査と簡単に比較できないが、それでもクラシック音楽が上位から始めて顔を出すのは交響曲、管弦楽曲、協奏曲がやっと15%、声楽曲、合唱曲や室内楽曲、器楽曲は6%である⁴⁾のと比べれば、かなり高い数値といえる。

その他では、ロックが男子に、ムード音楽が女子に好まれているのが注目される。

表 3 好きな音楽のジャンル (男158 女123 計281)

音楽のジャンル	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
歌 謡 曲	90	57.0	49	39.8	139	49.5
ク ラ シ ッ ク	32	20.2	49	39.8	81	28.8
ロ ッ ク	54	34.1	24	19.5	78	27.8
ム ー ド 音 楽	37	23.4	31	25.2	68	24.2
ジ ャ ズ	32	20.2	17	13.8	49	17.4
ニューミュージック	7	4.4	14	11.4	21	7.5
フォークソング	4	2.5	11	8.9	15	5.3
民 謡	5	略	2	略	7	略
ポ ッ プ ス	2	//	4	//	6	//
フュージョン	2	//	2	//	4	//
民 族 音 楽	0	//	1	//	1	//
邦 楽	0	//	1	//	1	//

上位六項目についての男女計の有意差 ($X^2=106.637, df=5, p<.01$)

表 4 嫌いな音楽のジャンル (男158 女123 計281)

音楽のジャンル	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
民 謡	70	44.3	48	39.0	118	42.0
ジ ャ ズ	31	19.6	26	21.1	57	20.3
ロ ッ ク	22	13.9	27	22.0	49	17.4
ム ー ド 音 楽	15	9.5	11	8.9	26	9.3
ク ラ シ ッ ク	16	10.1	4	3.3	20	7.1
歌 謡 曲	7	4.4	7	5.7	14	5.0
演 歌	2	略	4	略	6	略
フュージョン	0	//	1	//	1	//
パ ン ク	0	//	1	//	1	//

上位七項目についての男女計の有意差 ($X^2=214.048, df=6, p<.01$)

3. 学校外での音楽教育について

表5は学校以外で音楽教育を受けたかどうかを調べたものである。

表 5 学校以外で音楽教育を受けたことがあるもの (男158 女123 計281)

うけたことがある	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
	26	16.5	90	73.2	116	41.3

これを見ると女子が圧倒的に多いことがわかる。前にも述べたが、女子が男子よりも器楽を好む理由がここにあると思われる。

一般に楽典の知識はピアノなどの楽器の学習と不可分に結びついている。従って、楽典に対する理解力も女子の方が大きいと思われるが、その女子も男子に劣らず作曲を嫌っている。このことはつまり、現在広く行われている器楽教育は、読譜力などの力をつけることはできても、作曲能力を伸ばすには不十分であるということを示している。

4. 音楽サークル参加状況について

表6は小・中・高・大学それぞれの時代の音楽サークルへの参加状況について調べたものである。

表6 音楽サークルへの参加状況 (男158 女123 計281)

学 校	男		女		計	
	人	%	人	%	人	%
小学校時代	22	13.9	52	42.3	74	26.3
中学校 //	16	10.1	37	30.1	53	18.9
高 校 //	8	5.1	19	15.4	27	9.6
大 学 //	10	6.3	37	30.1	47	16.7

全体としては小・中・高校へと進学するに従って減少しているが、大学でかなりもちなおしている。受験競争のきびしさがサークル活動に表われていることを示している。また、女子が男子に比べ倍以上の数値を示しており、音楽サークルでは女子の活動が盛んなことを示している。

II. 他の調査との比較

1. 小学校5・6年生が望む音楽の学習形態

統計研究会の法岡淑子は東京、神奈川、静岡、滋賀、京都、福井の小学校9校に在籍する5・6年生の児童912名を対象に色々な調査を行っている⁶⁾が、その中で、「音楽の授業で望む学習形態」についても調査している。それによれば、やりたいと望んでいる学習形態では鑑賞、器楽、歌唱となっており、やりたくない方では理論、創作の順となっている。そして、特に男子の歌唱に対する意欲が少ないことを指摘し、学校の授業における歌唱が、子供達の日常の音楽行動あるいは興味からかけ離れているおそれがあると述べている。

理論および創作が、子供達にあまり望まれていないことについては、筆者の調査と一致している。

2. 好きな音楽に対する調査 (NHK 放送世論調査所の調査から)

図1は、NHK 放送世論調査所が昭和56年10月3日(土)4日(日)の2日間、全国7才以上の国民3600人を対象に個人面接法で行った調査の中の音楽に対する好みを、上位14種類に限ってグラフにしたものである。⁶⁾ また表7は、同じように上位14種類を男女および年齢別にわけたものである。⁷⁾

歌謡曲が男女、年齢に関係なく好まれているのがわかる。演歌、日本民謡は中・高年に好まれる一方、ロック、ニューミュージックは10代後半から20代にかけてがピークであり、急速に下降している。フォークソング、最近のポピュラーソング、ポップス調歌謡曲などもどちらかとい

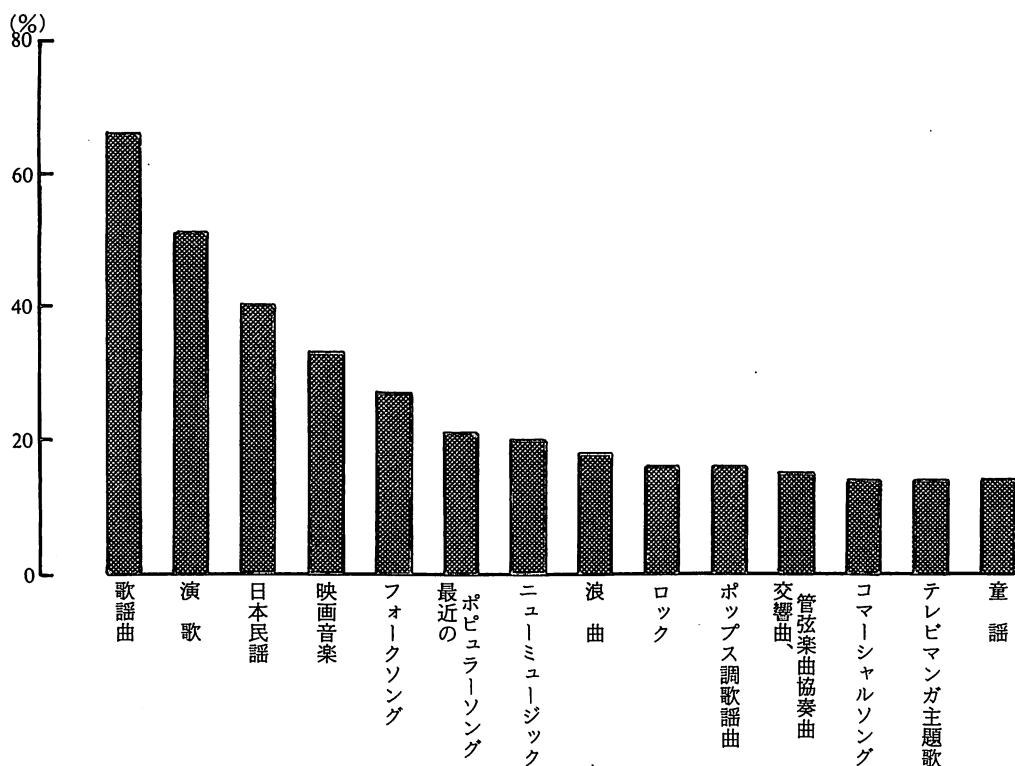


図1 好きな音楽⁶⁾

表7 男女別・年齢別の好きな音楽

音楽の種類	男(才)							女(才)						
	7	15	20	30	40	50	60	7	15	20	30	40	50	60
歌謡曲	52.4	59.6	61.3	68.7	74.9	66.3	62.1	65.5	75.2	69.3	71.2	69.1	65.8	59.9
演歌	9.8	19.3	40.3	70.4	77.1	76.2	67.7	10.0	8.8	34.9	59.7	70.0	73.7	63.3
日本民謡	3.7	4.6	13.8	36.1	63.9	71.3	77.4	11.4	4.4	12.7	39.6	57.9	66.3	78.3
映画音楽	22.0	50.5	47.0	45.7	40.1	26.5	7.2	14.4	48.7	57.5	50.7	35.6	17.4	7.7
フォークソング	9.8	56.0	49.7	30.9	16.3	8.3	3.6	13.5	69.0	71.2	37.8	23.2	10.5	4.8
最近のポピュラーソング	8.5	53.2	45.3	23.9	15.4	7.7	1.0	9.6	50.4	46.7	31.3	16.3	6.3	2.4
ニューミュージック	12.2	64.2	54.1	17.8	6.2	3.9	1.5	9.6	66.4	53.8	18.8	9.9	5.3	1.0
浪曲	1.2	1.8	3.9	17.8	28.6	33.1	55.4	0.0	0.0	0.0	5.9	12.9	30.5	50.7
ロック	11.4	59.6	48.6	17.0	7.9	2.8	1.5	9.6	51.3	30.2	14.2	4.7	3.2	0.5
ポップス調歌謡曲	11.4	37.6	40.9	19.1	9.3	4.4	2.1	11.4	28.3	40.6	16.7	7.7	4.7	1.4
交響曲、管弦楽曲、協奏曲	9.8	16.5	19.9	13.5	8.8	7.7	5.1	8.7	21.2	13.7	15.6	9.4	4.7	3.4
コマーシャルソング	31.3	31.2	20.4	5.2	5.7	1.1	2.6	27.9	35.4	23.6	7.6	9.4	4.2	2.9
テレビマンガ主題歌	55.7	10.1	5.5	2.2	4.0	1.7	1.0	52.4	12.4	11.3	10.8	4.3	3.7	1.4
童謡	17.5	0.9	2.8	7.0	7.0	6.6	8.7	24.9	5.3	17.0	30.9	14.9	15.8	18.8

えば若者向きではあるが年齢が上るに従ってゆるやかに減少している。

映画音楽、交響曲、管弦楽曲、協奏曲は最もゆるやかである。なお、面白いのは童謡が7~14才及び、女性の30代にピークがあることである。おそらく出産、育児と関係していると思われる。

全体を通じていえることは、マスコミ、特にテレビの影響が非常に大きいことである。日本人の音楽に対する好みはテレビを通じて商業主義によって動かされているといっても過言ではない。

III. 今後の課題

1. マスコミの影響

図2, は音楽のメディアについて、NHK 放送世論調査所が調べたものである。⁸⁾

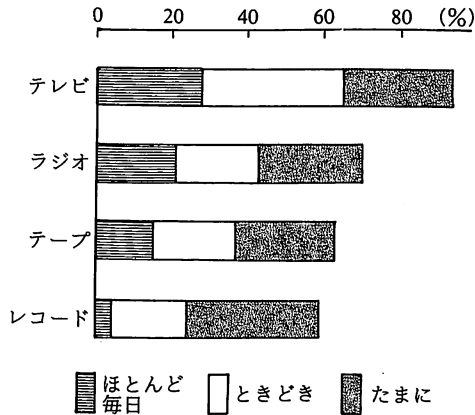


図2 音楽メディアの利用頻度⁸⁾

これをみれば、いかに日本人がテレビ等のマスコミを通じて音楽を楽しんでいるかがわかる。一方コンサートに行く人をクラシックに限ってしてみると、月1回以上行く人はわずか1%、年数回行く人でも4%、これに年1回程度しか行かない人を加えても11%にしかならない。⁹⁾ 大部分の人々は、わざわざコンサートに行かなくとも、居ながらにして音楽を楽しんでいるのである。

J・マーセルはこのようなマスコミの流す音楽に対して「今日、ラジオが普及していますが、そのダイヤルを回すと、まるで水道の蛇口から流れ出る水のように、音楽がほとぼり出ます。それを伴奏にしながら、私たちは友人とおしゃべりしたり、勉強する機会がよくあるのです。このような態度は、音楽の芸術的価値を傷つけ、音楽を愛し、理解する心を損なうものです。その音楽は、私たちの心の外側で、私たちに関係のない人が演奏しているのであって、それは、私たちのかわり知らないできごとです。」¹⁰⁾ と厳しい批判をしている。今日、売れんかな一点ばりの、内容をかえりみないマスコミのあり方は大いに批判されるべきである。

2. 演奏家の責任

クラシック音楽が、人々に愛され、親しまれない原因は、決してマスコミの影響だけではない。むしろ、演奏家自身にも大きな責任がある。すなわち、演奏家自身が、他のどのようなメディアの音楽をも色あせてしまわせるような優れた演奏を常に求め続けなければならないのである。

J・マーセルは「真面目な聴衆が演奏家から期待するものは、たんなるショーではなく、心と心のふれあいなのです。聴衆の優劣は、お行儀によって決められるものではありません。感動の有無によって決定されるのです。そのいっぽう、音楽家は、聴衆の共感と熱意がえられなかったら、成功は望めないのです。真摯な芸術家とは、自らを、美の王国への道案内であると自認する人です。」¹¹⁾と述べている。そして、演奏家の真剣な努力があれば、聴衆の力強い支持がえられると彼は主張するのである。

2. 音楽授業の改善

スポーツが人間の身体的な健康を、音楽が精神的な健康を担う上で重要であることはすでに述べた。従って、子供達の音楽教育こそ、最も大切なものだといえよう。

そのような意味では、すでに多くの教師たちによって、様々な音楽授業の改善がなされている。しかし、それらの一つ一つをとりあげることは、本研究の目的ではない。ただいえることは、教師は常に最高の教材を求めつづけねばならないと同時に、その教材が最もよく受け入れられ、理解される場を作っていかなければならないということである。たとえ、教師が最高の音楽を用意していても、子供達にそれを受け入れる準備ができていなければ、その努力は報われないことになる。

それと同時に、生演奏にふれる機会を子供達にぜひ用意して欲しい。そのためには、生演奏が他のどんなメディアよりすぐれていることが科学的に照明される必要があろう。このことについては別の機会に研究していきたいと考えている。

なお、統計処理については、教育工学センター、吉田道雄氏に協力を依頼した。

註

- 1) J. L. マーセル著、美田節子訳：「音楽教育と人間形成」、音楽之友社、昭49、p. 39.
- 2) 同書、p. 13.
- 3) NHK 放送世論調査所編：「現代人と音楽」、日本放送出版協会、昭57、p. 34.
- 4) 同書、p. 68.
- 5) 法岡淑子：「小学生の音楽環境」、音楽教育学、第13号、昭和59、p. 33.
- 6) 3) p. 68. なお、原著では音楽の種類を60種に分けている。
- 7) 同書、p. 37~46.
- 8) 同書、p. 38.
- 9) 同書、p. 60.
- 10) 1) p. 22.
- 11) 同書、p. 23.

(1986年5月23日 受理)